

パネルディスカッション・質疑応答

司会（早川） それでは時間が来ましたので、再開したいと思います。これから先は、パネルディスカッションという形で4人の方をパネリストにして、進めたいと思います。あまりうまい交通整理はとでもできませんが、午前中が「大原社研の意義と射程」、午後が「大原孫三郎の人と業績」ということで、テーマがそれぞれ違っております。伺っていて、三つぐらいの整理ができるのかなという感じがしました。

一つは、大原孫三郎という人は一体どういう人だろうかという、やはり人と業績の問題です。大原孫三郎論とでも言いますか、これが一つ。

それからもう一つは、大原社会問題研究所とは何だろうか。大原社会問題研究所論みたいなものが、もう一つであります。協調会の話も出ましたが、これも比較の話として、そしてゴードンさんの話も大原社研の存在意義みたいな話ですから一種の大原論と、強引に言えばそう言えるかと思えます。

三つ目の柱は、大原孫三郎と大原社会問題研究所、その関係はいかにという話かなど。それをもっと広げれば、大原社研だけではなくて、大原ネットワーク全体の話と。あえて言うと、その三つぐらいに分野としては分かれるのかなというのが、私の個人的な感想でございます。それに別に強引に従ってもらふ必要はありませんが、一応参考までに念頭に置いていただいて、もし質問とかご意見とかを伺う機会があればと思います。

進め方は、最初に各4人のパネリストの方に、午前と午後のお話を通じて、それぞれ感想めいたことを何でもけっこうですが、お一人ずつお話しいただきます。なるべく短い時間でお話しただいて、そして一通り意見交換が終わりましたら、フロアの方からご質問なりご意見なり自由にお話しただければと思います。では、4人のパネリストの方、どなたの順番でもいいのですが、では発言順に高橋さん、二村さん、アンドルー・ゴードンさん、そして大原さんということでよろしいでしょうか。相互に意見交換があっても、それは当然けっこうでございます。

高橋 意見交換、ディスカッションというよりは、むしろ今大原さんのお話を伺っていて、ふと気がついたところがあるのです。前から思っていたことかもしれませんが、今も少し申し上げた通り、何年前か、「情けの庭」と「里の水車」が一緒に展示された機会があったのです。この機会を逃してはいかんと思ひまして、飛んで行って見えました。

その時に、児島という画家の雰囲気自分なりにわかったような気がするのですが、今日お話を伺っていますと、孫三郎さんは児島虎次郎に言わば社会ウォッチャーとして、外国へ行って勉強しろと言ったというので、そんな雰囲気もよくわかるわけです。

要するに私流に言うと、社会派的な関心で児島虎次郎はフランスで絵を買ったりしているわけです。特に、今ある大原の美術館ではなく、前の美術館の中心的な展示で、今は裏のほうに行ってい

る児島虎次郎の初期のフランスで買って来た作品を見ますと、労働者の絵がけっこうあったような気がするのです。何点かあったのではないのでしょうか。

そうしますと、児島虎次郎という人は、社会ウォッチャー・社会派であると同時に、社会労働と言ってもいいぐらい問題の関心を広げていたのではないかと。こういう児島虎次郎論というのはいかなものかということ、この機会に是非お話を伺いたいと思っております。

二村 先ほど話し漏らしたことを付け加えておきたいと思えます。それは、孫三郎が社会文化的貢献においてもっとも力を入れたのは、人を育てることだったという点です。これはお父上の孝四郎さんが「大原奨学会」を設けて、郷土の有為な若者を東京などに学ばせた事業を引き継いだものとも言えるのですが、将来の見込みがあると判断した人をつぎつぎと留学させています。その数は30人にも達し、うち8人は社会問題研究所の研究員です。ご本人は、海外に行かれたのは中国が唯一の例外で、ほとんど日本の外には出られなかった方ですが、見込みがあると判断した若者には留学を勧め、その資金を出しておられます。

もうひとつは、図書や絵画を集め、それを公開することに力を入れている点です。これは、留学とほとんど同じお考えだったと思いますが、知の成果としての書物を集め、それを皆に見せる図書館をあちこちに作っています。研究所に図書館を設けるのは別に不思議ではありませんが、倉紡の社内に、それも本店ばかりでなく工場にも図書館を作らせているのです。こういう学問尊重の精神を、彼は一体どこで身につけたのでしょうか。学校制度では落ちこぼれたのですが、孫三郎はたいへん学ぶ力を持っていた人だと思えます。「耳学問」をよくした人で、実際、倉敷日曜講演には各界の一流の人を呼び、それぞれに自由なテーマで話をさせています。何か注文して話してもらうというより、講師に自由に演題を決めさせているに違いないような、多種多様な話なのです。

そうした耳学問だけでなく、本もたくさん読んでいたようです。『聖書』、二宮尊徳『報徳記』、徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』、河上肇『貧乏物語』などに感銘を受けたことが分かっています。いずれも、地主として、大富豪として、いかにその社会的責任を果たすべきかといったことへの答を求めて読書していたようです。

ところで、この機会に謙一郎さんに伺いたいと思っておりますが、總一郎さんが孫三郎について語った中で、どういう意味だろうと思うところがあります。それは「父の多くの事業への意欲は、一種の反抗精神に根ざし、あるいはそれに支えられたものが稀ではなく、単なる理想主義的理解だけでは解釈しがたいものが多々その中にあった」というのですが、これは一体どういうことなのか。何に対する反抗だったのか。そこについて何かお父様から聞いていらっしゃることはないでしょうか。この機会に伺えれば幸いです。

ゴードン 三つ質問があります。第一に、このパネリストにではなく、今現在の大原社研に対する質問なのですが、研究所の名前は「大原社会問題研究所」ですが、出版物は『日本労働年鑑』です。今朝話をしていたように、創立した当時は、社会問題を非常に広く思っていたのですが、その出版物を例えば『日本社会年鑑』とか他のネーミングにするという議論があったかどうか。あるいは『労働年鑑』を作り始めた時の発想とかその議論について、もし何かご存知ならば、もっと知りたいわけですね。

第二の質問は、協調会についてですが、高橋先生が言われたように、協調会は労使協調というこ

とで、誰が協調するかというと労使です。そういう言い方ならば、両方はある意味で対等な存在であり、一緒に協調する相手となるわけですから、ある種の産業民主主義であり、あるいはそれに発展できるような存在であるわけです。しかし、最初からそれに対する批判もあったのですね。そういう設定だと危ない、労と使を同じレベルにするのは危ないという企業あるいは右からの発想があって、1920年代半ばからすでにそうでしたが、協調よりは労使融合だとか、あるいは違う概念で近代産業の問題を考えなければならないという発想が非常に強まってきたわけです。その時、協会の中で、どういう対応があったのか知りたいわけです。

そして最後の質問ですが、今日のフォーラムは、私は歴史学者だから非常にうれしいわけですが、90年を振り返って今までを見るのが主でしたけれども、やはり労働問題とか社会問題は今もなくなはいし、大原社研は歴史を見るのではなく、その時代その時代の現状を見るのが一応ミッションだった感じがするのです。そこでいきなりなのですが、五十嵐所長でもどなたでもいいですが、今から10年間どの辺に一番力を入れようとしているか、教えていただけるとありがたいです。

司会 それでは大原謙一郎さんにひと言ですが、高橋さんからの質問と、それから二村さんからも、児島虎次郎の話、それから反骨精神ないし反抗精神の意味みたいなものと、お聞きしたいことが二つ出ておりますので、ご感想も含めてお願いします。

大原 本当に非常に孫三郎のこと、それから児島のことを深く考えていただいて、うれしく思います。孫三郎が反抗精神だったということを、總一郎が書いていた。このことについて私に何か



言っていたかということ、実はあまり言っておりません。ただ、孫三郎は確かに反抗的であったのですが、誰に対して反抗的だったのか、あるいは何か特定の階級に対して反抗的だったのか、あるいは特定の理念に対して反抗的だったのか、何かそういうことを見ていきますと、ターゲットがあまりはっきりしてこないのです。

しかし何となく、世の中の理不尽とか、あるいは自分への言わばいわれなき圧力ですとか、手足を縛るものに対しては、非常に強く反発をした人ではあったかもしれない。また、人のそういう反抗に対しても。何か支援というのはおかしいですが、共感はずぶん持っていたのかなど。

というのも、学生時代から公害問題、鉱山の鉱毒問題に関しては非常に興味を持って、現場を見に行ったりしていましたし、そういった中で、そういうことを一生懸命やっている仲間みたいな奴にだまされたりしたこともあったようですが、それでも言わば没入していくようなところがあった。

それから、これも伝えられている話ですが、子どもの頃に仲間から布団蒸しにされて、参ったかと言われても、絶対に参ったと言わなかったとか。そういう面での反抗心というのは、たぶんあったらろうと思います。

これは、私が孫三郎の言うことをいろいろ聞き、お話も直接知った人から聞いていますが、人の嘘がすごく見える人だった。本当ではなく、ごまかそうとしているのが、すごく見える人だった。本音ではなく表面を飾ろうとしているのが見えてしまい、孫三郎から「ああいう時に怒られた。こういう時に怒られた」と、私よりずっと年上の方からよく聞きました。例えば帳簿一つ見ても、何かこの数字は違うというのが読める。読めるのは、たぶん足し算引き算したのではなく、それを言っている人の表情を見ていて読んだのだらうと思いますが、そのようなことがすごく読める人だったようです。

そういうことで、何かこれはちょっと筋が通らないよ、言っていることとやっていることが違うよというようなこと、あるいは理不尽なプレッシャーに関しては、非常に強く反発した人だったのではないか。

実はそれが、さっきのもう一つの兎島の問題にも関わってくるのですが、兎島は確かに、そういう生活者の視点を非常に強く持っていたように思いますので、さっき見ていただいたスライドの中でも、本当に市井の小さな生活者の言わば気持ち・心の動きを優しく捉えるというところはあったと思います。そういうところにやはり、世の中のいろいろな矛盾が集中して出てくるわけですから、それがある意味で、言わば社会派的なニュアンスも与えたのかもしれないと思います。

ただ、それならば兎島自身が、プロレタリアートとか、そういったものの理念を持っていたかということ、これははなはだ怪しいと私は思っています。学芸課長も来ておりますので、そこら辺は私よりよく分析している人がいるかもしれませんが、ただ生活者に対する非常に細やかな視線は持っていた。これは作品の中からも、間違いなく持っていたような気がします。

特に子どもたちが学校に行っている途中の姿とか、二人の子どもが仲よく並んで芝生に座っている姿とか、モデルの子どもがほとんど眠くなりながら、それでも我慢して立っている姿とか、さっき見ていただいた「里の水車」で、働き疲れた親子が少し憩っている姿とか、そういう姿を写している彼自身の作品の中にも、そういう生活者に対する共感、特に弱者に対する共感が読み取れるというのは、おっしゃる通りだと思います。

そういった中で、もう一つの問題として出てきました、本というものに対してどうだったのか。孫三郎は無学の天才と言われていまして、耳学問ですべてをやったと言われていまして。もしかして、これも伝説なのかもしれないという感じがしているのは、孫三郎が残した蔵書、自分が読んでいた本がありまして、そういうものを見ていると、けっこう読んだ形跡があるらしい。さっきおっしゃったように、その中の何を読んでいたのかということ、もう少し分析すれば、読書傾向も出てくるかもしれませんが、かなり読んでいたらしい。ただ買って積んでおいたのではない、というところが見えています。

それから児島虎次郎も、けっこう本を読んでいます。特に日本語の本だけではなく、児島の場合にはフランス語の本とかをいくつか読破しているらしい。というのは、線が引ん張ってあったりしますので、たぶんそうだったのだろうと。エジプトに行ったというのも、当時エジプトがヨーロッパの一つの精神的支柱だったということは、かなり新発見だったのですね。それまでは、ただの骨とう品だと思われていたのが、あそこにもかなり深い精神的世界があったということがちょうど発見され始めた頃に、児島がヨーロッパにいたと思います。そういう意味で児島自身もけっこう本を読んでいたと思います。

それから、私の父ですが、總一郎は大変な読書家で、よく本を読んでおりました。そのようなことも考え合わせると、孫三郎だけが本を読まずに聞き書きだけをしていたというのは、ちょっと考えにくい。実際の証拠として、彼が持っていた蔵書にもけっこう読んだ跡が見えるというようなことから、孫三郎自身、字になっている情報に対してはかなり感覚を持っていたのかなと。

それだから、たぶんおっしゃるように、労働科学研究所でももちろんそうですし、社会問題研究所でもそうですし、それからさっきスライドに出てきましたが、当時の農業研究所でもベッファーさんという植物生理学の方の書物をたくさん集めて、そういったものを一般に見やすいように公開したということは、そういう一つの精神のつながりがつながり合ったのかな、という気がしています。今のご質問に答えたことになるか、よくわかりませんが、そのような感じがしています。

司会 何かひと言ありますか。

二村 反抗心で企業を経営したという言葉が気になったものですから、あれこれ考え、私なりに出した答えはこういうことです。孫三郎は、幼いときからずっと差別されてきたわけです。金持ちのボンボンですから、学校の先生も、仲間も彼を特別扱います。閑谷賢時代に布団蒸しにされたり、東京専門学校時代に悪所通いの金主にさせられたりしたエピソードが示すように、彼はしょっちゅういじめられたり、ちやほやされて利用されている。そうした差別に彼は絶えず怒り、反抗してきたのではないのでしょうか。ちょっと変な言い方になりますが、金持ちとして差別されたことが、孫三郎の原体験にある。生まれながら世の中の多くの人とは異なった立場に立たされた者として、いかに身を処すべきかをたえず考えざるを得なかったのでしょうか。また負けず嫌いでしたから、金持ちだからというより、俺が稼いだ分を俺が使うのであれば文句はあるまい。こうした負けず嫌いの気持ちで企業経営に取り組んだところがあったのではなかったのでしょうか。倉紡を大きくしたのも、そうした意気込み、反抗心があったのではないかと。總一郎さんは、やや抽象的・哲学的な表現をされることが多いので、私の理解は間違っているかもしれないのですが、そんな意味合いで、「父の多くの事業への意欲は、一種の反抗精神に根ざし」ていたという表現になったのではないだろうか、

そのように考えていることだけを付け加えさせていただきます。

司会 この話はここで止めておきましょうか。高橋さん、ゴードンさんの話で協調会のことが出ましたので、初期の頃の協調会、特に20年代の中の思想的な違いみたいなもの、あるいは路線の違いみたいなものということでひと言。それから、どなたからでもいいのですが、要するに社会問題研究所が何で『労働年鑑』だったのだというネーミングの問題ですね。これは根本に関わる問題で、どなたとも言えず、二村さんでも五十嵐さんでもいいのですが。今後10年間の話は、あとにしましょう。10年間というと、100周年なのですよ。身震いするような、100周年というのはどこにあるのかと思うような話ですが、これは最後のほうで五十嵐さんにひと言大演説をしてもらうとして、前のほうを高橋さんとどなたか。

高橋 ちょっと発言させていただきますが、その前にもし時間があつたら、児島虎次郎と石井十次と柿原政一郎の関係について、ちょっとお話しいただけないかなと。それは取っておいていただければ、けっこうであります。

さっきゴードンさんのほうから言われました、協調会の労使協調主義のその後の流れですが、特に戦時体制になりますと、産業報国であります。これも協調会に対する一つの誤解なのですが、協調会は産業報国会を作ったのだと。したがって、産報の責任を取らされてGHQから解散命令を受けたのだというお話があるわけですが、これは少し注釈を加える必要があります。

つまり、確かに協調会は、戦時労働体制として労使協調を強化しなければならんということで、今の言葉で言うと、労働を含んだコーポラティズムですね。経営者と労働者、そしてそこに労働組合が入って行って、一体化しなければならんということを言いました。産業報国でありました。しかし、その場合に必ず、労働者の代表を入れること、組合の代表を入れること、今まで実現できなかった労働者に市民権を与えること、労働者に市民権を与えなければ戦時体制は成り立たないというのが、協調会の趣旨であり、結局は産業報国会に与しません。産業報国会から離脱していくわけです。そういうのが戦時中の協調会でありました。

だから、そういう意味では必ずしも産報体制ということではなしに、戦時下の労働体制であっても、むしろその機会に労働者の市民的な権利を獲得するというぐらいの思い込みが、協調会の指導部にあったのは確かだと思います。そういう意味で評価しているのですが、これは評価のし過ぎかどうかということでもあります。

二村 労働問題に特化した研究所という印象があるのは、戦後の労働運動が社会的にも重要だった時期に『日本労働年鑑』を出し続けてきたことが、一因ではないかと思えます。創立直後の研究所は、別に労働問題だけを研究していたわけではなく、マルクス経済学はもちろん、権田さんは娯楽問題を研究し、大林さんは女給調査や大阪の公園調査といった女性問題や都市問題を研究しています。また、『社会衛生年鑑』や『社会事業年鑑』を出すなど、社会事業研究は主要な研究分野のひとつでした。『社会衛生年鑑』のほうは労働科学研究所ができてから、そちらに移ったのですが。

ですから、もともとは労働問題の研究所というより、私は、社会科学の高等研究所だったと考えています。要するに研究員自身の学問的・社会的な問題関心にもとづいて自由に研究テーマを選んで研究する機関でした。

ただ、研究所として一貫して継続した出版物が『日本労働年鑑』で、これしか出せなかった時期

が長いので「労働専門の研究所」というように外からは見えたのでしょうか。研究所が「労働問題研究所」ではなく「社会問題研究所」と名乗っていることは、これから積極的な意義を發揮しうるのではないかと、私は考えております。

司会 戦後の話はわかるのですが、その出発点のところですね。1919年に大原社研ができて20年ですから、第1集の年鑑が『労働年鑑』として出たと。なぜ『社会年鑑』ではなかったのかという話は、どうですか。

二村 1919年という年は、まさに日本の労働組合運動が本格的に発足した時期なのですね。ILOができ、日本政府もどうしても労働組合を公認せざるを得なくなった。法律的に認めないまでも、行政的にはその存在を否定しえなくなった年で、ILO労働代表の選出ともからんで、労働組合が一斉に生まれたのです。つまり、日本の労働組合運動が再発した年だった。だから、この年、研究所としての刊行物を出すことを考えると、そのひとつが『日本労働年鑑』だったのは、ある意味では非常に自然で、また適切だったと思います。

高橋 二村さんにひと言伺いたいのですが、当時は1910年代ですと、職工と女工なのですよ。だから、職工と女工の中で労働というものに市民権を与えたという、大英断であったという見方はどうでしょうか。

二村 国際労働機関という言葉があるように、「労働」はすでにならかなり一般的に認められていた言葉です。「職工」とか「女工」というのは、工場で働く肉体労働者を指す言葉でした。その他の労働者も含める用語としては「労働」しかなかったのではないのでしょうか。『職工年鑑』ではあり得ない。『労働年鑑』でないと、労働組合や労働争議を記録することは出来ないのではないかと思います。

高橋 あえて反論しますと（笑）、最初の日本の1910年代にできた労働組合は、友愛会ですからね。まさに今鳩山さんが言っている博愛なのですよ。友愛会がようやく労働組合になるのが1910年代後半、20年に入るところですから、そういう意味でも、けっこう労働という概念を使うということには、思い切り、決断、踏み切りがあったと評価したいわけです。

司会 おそらく、そういうことで結論は出ないけれども、だいたい近いのではないかという話で（笑）、労働科学がまさに労働という名前を付けたことの意義みたいなどころと、かなり一面通じると思うのです。ILOもちょうど1919年に設立されたので、この年はまさに「労働」だったのです。その辺でこの話は次に移りましょう。あと30分ですが、フロアの方からご質問なりご意見なり自由にどうぞ。

永瀬 桜美林大学の永瀬順弘と申します。大原美術館の理事長の大原さんに、大原孫三郎についてお聞きしたいと思います。私は、この事実は全然知らないのですが、先ほど二村先生から、大原孫三郎が外国へ出かけたのは中国だけだったというお話でした。そして中国に出かけた時、我々の大学の創始者である清水安三氏が、北京の非常に貧しい所と一番進んだ所を見せて、その案内のお礼にダイヤモンドか何か知りませんが、高価な指輪を安三氏の奥さんのほうにしてくれるような話があって、それは要らないから留学費用を出して欲しいということで、当時のお金で何千円とかいうお話をお聞きしています。

清水安三氏は、中国へ布教活動で出かけているのです。それで一つお聞きしたいのは、そういうキリスト教と大原孫三郎氏の出会いというのは、どこかであったのでしょうか。そういうことがや

はり私は、先ほどネットワークがいろいろありましたけれども、ヒューマニズムみたいなものの根底に流れているのではないかと感じるのですが、その辺のことについて教えていただければと思います。

司会 では、お願いします。

大原 キリスト教と孫三郎との言わば接点というのは、見えてはいるのですが、いろいろ謎がたくさん含まれているということです。孫三郎という人はご承知の通り、かなり放蕩息子でして、いろいろなところで遊びまわっていました。そういう中で、心配した周りの人が「とにかくこいつの話を一回聴け」ということで、石井十次の話聞いてすっかり参ってしまったというのが、一応ストーリーになっています。

しかし孫三郎という人自身は、さっきも少し申し上げましたが、いろいろな矛盾が自分の中にある人と考えざるを得ない。これはさっきの話の中にもありました、反抗精神ということも言っている時にも、総一郎はたぶん「ただの理想主義では割り切れない人だったのだ」ということの中で、反抗精神と言っているのだと思います。ただのこれ、ただのあれでは、なかなか割り切れない。

ということで、キリスト教についても、「私はきっちり信仰を持って」ということは本人も言っているのですが、それではキリスト者として最後を全うしたかという、なかなかそうも見えない。

ただ、おっしゃるように、そういう人道ですとか正義感ですとか、そういうことに関してはキリスト教で触発されたのか、あるいは自分の中にあったものがそれで形になったのか、そこら辺はいろいろありますけれども、石井十次とキリスト教に触れたことによって、何か自分の中で燃え上がるものがあつた。これは間違いなことだと思えます。

そのようなことなど、いろいろな関連で言いますと、さっきの高橋先生の話とも関連するのですが、柿原政一郎という男は何だったのだとおっしゃいました。実はこれは、孫三郎の秘書と言ってしまつてはいけないくらいの腹心と言いましょか。何かをやる時に柿原さんが孫三郎の意を体し



て、いろいろなことをアレンジされたという方ですが、この方は自ら社会主義者といっておられた方で、「私は社会主義者だから、あなたみたいな資本家と一緒に仕事することはできないのだ」というようなことも言ったりもしています。

しかし、共に仕事をしていました。そういう中でいくつかの共通ワードがあるのです。さっきの虎次郎、十次、柿原さん、それから清水先生など、全部に共通するのは正義感、ひたむき、情の厚さ、そういったものだと思いますので、脳細胞が考えていることに共感する以上に、そういう心に共感する人だったのかなと。だから、脳細胞のレベルで文字にしまうと矛盾だらけなのだけれども、一つ共通するものを取ってくれば、ひたむきであり、正義感があり、そういうものに対して孫三郎は常に共感していた。そのように整理できないかなと。桜美林さんもそういう感じではなかったのかなという感じがしています。

司会 よろしいですか。では、他の方どうぞ。

小野 慶応大学所属の小野修三と申します。二村先生のウェブ上のご研究にとっても励まされております。特に石井記念愛染園から大原社会問題研究所、つまり大原社研の起源に関わるところで少し勉強しております。今日の先生のレジュメの中で、1917年（大正6年）に石井記念愛染園の披露パーティーと言いますから、それがこの1月にあったわけですが、その時の挨拶の中に、確かに救済事業研究所という言葉は出てくるのですが、私の理解では、これは宣言、実際にあるものではなくて、こういうものを作りたいという宣言ではなかったかと。

つまり、そのことでは、その翌年、1918年（大正7年）の春に、高田慎吾は実際に大阪に来るのですね。そして夏の米騒動を越して、9月に愛染園の中で救済事業の職員のための学校の主任と言いますか、講師になると。実際に高田慎吾が愛染園の中で研究活動をしたという雰囲気は、私は感じておりません。かつ彼に対して、多くの予算が費やされたという雰囲気を感じておりません。つまり、予算の上では確かに多くのお金が愛染園の理事会等で計上されていても、実際にどこでそれが使われたかというのは、私の勉強の限りではない。

つまり、大原社会問題研究所はやはり大正の8年に財団法人として作られるわけですが、そこで初めて花開くと。その前の愛染園の時には、言葉としてはありましたが、ほとんど活動はなかったのではないかと私は思っておりまして、その点、二村先生のお考えをお伺いできればと思います。

二村 おっしゃられたことは、おそらくその通りだろうと思います。救済事業研究室はまだ準備段階で、図書の収集を始めたくらいのもので、のちの社会問題研究所のような活動を始めてはなかったと思います。ただ、私が言いたかったのは、孫三郎さんは、米騒動を機に防貧の研究を始めようといった、とっさの思いつきで始めた事業ではなかったことです。『孫三郎伝』によりますと、小河滋次郎と安部磯雄が倉敷日曜講演に来て話を聞いた時に、これからはやはり単に社会事業では駄目で、もっと社会そのものを貧乏が出ないような仕組みにする研究をしなければならぬと自覚させられた、という趣旨のことが出てくるのですね。大津寄勝典さんの本の中に倉敷日曜講演の一覧表がありまして、誰がいつどういうテーマで話をしたということがわかるようになっていますから、それをご覧いただければと思いますが、小河滋次郎の講演は、愛染園設立よりさらに3年ほど前のことだったと思います。

ですから、孫三郎の社会問題研究所への構想は、かなり長い時間をかけて熟成していったもので、

それが大原社会問題研究所として花開くことにはなったと思うのです。ただ最初は、おそらく岡山孤児院のいろいろな失敗の経験と言うか、孫三郎自身が岡山孤児院の実績に満足しえなかった点をどう打開したら良いか、講演に来た講師の方々に質問し、そうした答えの中から、考えついたことではないかと思っているのです。

もう一つ重要なのは、高等小学校で同級生だった山川均の存在です。ご承知のとおり、山川均は日本共産党の創立に参加し、労農派の論客として論壇で活躍し、戦後は左派社会党の理論的支柱となった人物ですが、彼は高等小学校時代に孫三郎とたいへん親しい友人でした。山川の自伝に記されているエピソードですが、彼が同志社の学生時代に不敬罪で実刑を受けたとき、孫三郎は巢鴨監獄まで面会に行っているのです。山川は「当時獄中に私を訪ねることは、好意のほかに、そうとうの勇気が必要だった。私は旧友の友情に心から感謝した」と記しています。山川は、姉の夫への尊敬の言葉を自伝に書き残していますが、その義兄の林源十郎は大原家と親しく、倉敷の重役でもありました。林は熱心なクリスチャンで人格者として周囲の尊敬をあつめており、東京で大借金をつくって家に連れ戻された孫三郎の監督役を依頼されたのは、他ならぬこの人でした。孫三郎に石井十次を紹介したのも林源十郎であり、結婚の際は媒酌人となり、倉敷日曜講演の世話人をつとめるなど、孫三郎の年上の友人として、いつも孫三郎の傍にいたのです。孫三郎は、林源十郎と顔をあわせる度に、たえず山川均を思い出していたのではないのでしょうか。私は、倉敷という小さな村の少数の旧家が、大原孫三郎や山川均を生み、さらには宇野弘蔵や日本女子大の学長となった大橋広を生んだ知的風土、精神的風土がもっと注目されてよいと考えています。

司会 大変重要な指摘なのですが、関連してどなたかご意見があれば一言お願いします。はい、どうぞ。

柳沢 大原美術館の柳沢秀行ですけれども、理事長からすると、おじいさまのことなので、ヒストリアンのように語りづらいと思うので、日頃私も伺っている話を私から補足させていただきます。

まず、岡山と倉敷は隣り合った街です。安部磯雄さんも岡山で、一時高校の教師をしておりました。早い段階から同志社から人が入りまして、同志社系統のプロテスタントの博愛主義がかなり根付いておりました。その中で、岡山市の中には女学校などもできますが、それは石井十次さんが孤児院を構えていた山のすぐ上にできるという地理的な関係でもあります。そういう具合に、すでに孫三郎がキリスト教のプロテスタントの信仰と出会う以前から、岡山市域ではそういった博愛思想がかなり根付いていて、文化的な事業も行われていました。

それから、倉敷から高梁川という大きな川を中国山地のほうに入っていきますと、高梁という町があります。この高梁の町の隣が、児島虎次郎の生まれた所なのですが、実は岡山県内では一番早く高梁にキリスト教の教会ができておまして、その倉敷川流域から幾人もの同志社関係の先生方あるいはアーティストが生まれております。そういうことからしても、倉敷からすると、上に上がっても横に行っても、キリスト教のプロテスタントは非常に強く根付いていたという関係がございます。

あともちろん倉敷でも、林源十郎さんを中心に同志社系の人たちが活躍をしていました。1923年だったと思いますが、新しい倉敷の教会堂を西村伊作の設計で作っております。ただこれが単なる信仰の場というだけではなくて、先ほどから名前が出ている倉敷日曜講演会を引き継ぐ形で、倉敷

文化講演会というものがあります。かつ、そういうものを担っていく林桂二郎さんたちのネットワークが倉敷文化協会というものを作っていて、そういったところの講演会の場所として、キリスト教教会がいつも使われている。逆に言うと、信仰の場というだけではなく、カルチャーセンター的な意味合いも持って、おそらく教会堂も作られたのだらうと思っています。そういう状況がございました。

それから、先ほどの虎次郎と労働者の話なのですが、児島虎次郎が「情けの庭」を描き出品したのが1907年東京府勸業博覧会の美術展ですから、1907年の段階で「情けの庭」を皇后陛下が買い上げるというのは、極めて政治的に正しい判断があったのだと思います。というのが、「情けの庭」は岡山孤児院の一場面を取材しておりますし、1907年というタイミングですから、ここにいらっしゃる方ですと、どういう形で孤児が増えたかというのもよくご理解いただいていると思います。児島がそこに行き、そういった情景を描いたということが、皇后が買うにも、非常に政治的にも正しい主題であったと考えております。もちろん造形的な処理も、当時の画集を見ますと、圧倒的に児島の作品はいいです。

そういう作品を描くのに二つ流れがございまして、一つは東京美術学校。黒田清輝の教育方針で整って、絵画というものがただイマジネーションやファンタジーを描くものではなく、あるいはただ単に何か美しく再現するだけではなく、何か思想性を表明するという教育が行われてきている、というのが一つあります。ちなみに児島の「情けの庭」は1等賞を取った時に、3等末席には青木繁という作家が、日本の古代をテーマにした浪漫的な作品を描きまして、見事落選というか末席に終わってしまうという状況がありました。

それと1900年の初頭ぐらいから、社会の下層にある人々を描くという主題が、おそらく文学のほうの自然主義からの流れもあって、絵画の世界でも非常に流行っています。ですから、あの時点で児島があ作品を描き、かつ皇后陛下が買い上げになったというのは、時代状況としてピッタリはまっていく状況です。

それから、児島はフランスからベルギーに行きました。これがおそらく、児島自身が労働ということに対して関心があったことにつながると思うのですが、フランスではなかなか花開かなかったのが、ベルギーのアントワープに行って、一気に花開きます。当時のアントワープでは、児島が習いました先生方あるいはエミール・クラウスといった作家ですとか、あと大原美術館にはレオン・フレデリックの大きな作品がありますが、いずれもベルギーの作家たちは、労働を主題にした作品をその頃大変展開していました。

ですから児島としても、単に描き方だけの問題ではなく、主題という点でも、ベルギーに行ったというのは肌が合ったのだと思っています。ということで、少し厚かましいぐらいですが、補足的にお話しさせていただきました。

司会 どうもありがとうございました。では他の方で、あと2、3人で時間切れになるかと思いますが、どなたかいらっしゃいますでしょうか。どうぞ。

加藤 一橋大学の加藤哲郎と申します。高橋先生のお話の中で、ソ連のML研、レーニン研究所ではなく、フランクフルトの社会問題研究所、Sozialforschungと一緒にやったのだと。言わば念頭に置いていたのだという話があって、しかも雑誌のタイトルがSozialforschungで、フランクフルト学

派のほうだというお話があったのですが、これはどこまで根拠があるかということなのですが。

フランクフルトの社会主義研究所は、初期はむしろ福本和夫とかりヒャルト・ゾルゲもいましたし、カール・コルシュとか、もう少しあとだとヴィットフォークとか、どちらかというところ共産党系がけっこう入っているわけです。それから30年代になりますと、アドルノ、ホルクハイマー等のユダヤ人の学者たちがいて、それがアメリカに亡命して、のちの戦後だとニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチになっていくという流れがありますね。

つまり、高野がフランクフルト社会問題研究所を念頭に置いていたという場合、誰か具体的な個人を想定しているのか。あるいは何らかの形で、例えば森戸辰男などが誰かフランクフルトのグリェンベルクとか、そういう人たちと個人的なつながりがあったのかどうか。その辺のところは何かわかりましたら、教えていただければと思います。

司会 かなり突っ込んだ質問ですが、どうぞよろしくお願いします。

高橋 フランクフルト学派に話がいったならば会場を見まわして加藤さんを探し、加藤さんを指名して説明をお願いしようと思っていたところでした。むしろこの機会に私として加藤さんに伺いたいことがあります。大原社研と同じ時期に出発したフランクフルト社会研究所を高野岩三郎が知らないわけではない、それで大原社研の機関誌にSozialforschungとの呼称を与えたのでしょうか。しかし、呼称だけで、その後の大原社研の研究活動にフランクフルト学派の人たちの影響を見出せないし、その学派の人の名が出てこないのはなぜでしょうか。大原社研の中心になっていた人、たとえば河野密氏から出てくるのは第二半インターナショナルのカール・カウツキーでした。河野さんから直接、カウツキーの影響の大きさを話してもらったことがあります。フランクフルト学派はフランクフルト大学を拠点として活動するのではなく、亡命のことがあり、主としてアメリカで活躍したグループであったと見てよいのでしょうか。

司会 では加藤さん、もう一言コメントを。カウツキーも出てきたので（笑）。

加藤 カウツキーというのは知りませんでしたが、別に全部アメリカに亡命したわけではなく、戦後でしたらユルゲン・ハーバーマスとか、今ベルリン大学のクラウス・オッフエとかも一応フランクフルト学派の流れです。そういう意味では、ずっと続いているわけですね。ただ、高野が訪欧した時期あるいは大原ができた時期に、どれぐらいフランクフルトを意識していたのかというのが問題で、特にさっきから社会問題なのか労働なのかと、ネーミングが問題になっていますけれども、そこであえてSozialforschungというのを英訳で使い、日本語では社会問題であったということに何らかの因果関係があるのだろうかというのが、基本的な疑問で、私もこれから調べたいと思っていますけれども。

司会 二村さん、何かありますか。

二村 何時つくられたものかははっきりしませんが、戦前に研究所の建物の絵葉書を作ったとき、Ohara Institute für Sozialforschungとドイツ語名を入れてたものがあったと記憶しています。フランクフルト社会研究所の創立は1923年ですから、創立時点で大原社研がこの研究所を意識しようはありません。ただ、1930年に刊行された改造社の『社会科学大辞典』の「大原社会問題研究所」の項目は高野岩三郎の執筆ですが、その文中で「独逸フランクフルトの社会問題研究所」について言及していますから、1930年以前、おそらくは1926年秋の渡欧時には、その存在を認識していたと思

われます。なお、英語名のThe Ohara Institute of Social Researchの初出は1926年に刊行された研究所の英文パンフレットです。これは、おそらく、この年の高野の渡欧時に作成されたものでしょう。なお、1927年3月刊行の『大原社会問題研究所雑誌』第5巻第1号の裏表紙にはThe Ohara Institute for Social Researchと記されています。ofではなくforと改めているのです。いずれにせよ「社会問題研究=Study of Social Problems」とは訳さず、一貫して「社会研究=Social Research」を使っています。

司会 あとお一人ぐらい、どなたか、ありますでしょうか。あるいはパネリストの方で。ゴードンさん、最初に質問だけされていますが、いいですか。他の方もよろしいですか。では、少し現状と未来の話ということで、90年から100年という10年のビジョンについて話していただきたいと思います。

五十嵐 残りの時間を使いまして、発言させていただきます。今日は過去の話が中心で、将来の話は出ないと思っていたのですが、質問されてしまいました。しかも、元所長が3人、前所長が1人と先輩が揃っている前で研究所の将来を語れというわけです、何を語ったら良いのか、面食らっております。

とりあえず、今、研究所はどういうことをやっているのか、ここから話をさせていただきたいと思います。90周年を記念するというので、このフォーラムを開催させていただきましたが、他に二つ、創立90周年記念の取り組みを行っています。

一つは、東北大学の村泉先生などを中心とするグループと共同プロジェクトという形で、共産党宣言の翻訳などを手掛かりに、戦前の日本においてマルクス主義はどのような形で受容されたかという研究です。これは、いずれ雑誌やウェブで発表する予定です。

もう一つは、旬報社との共同プロジェクトで、『社会労働大事典』という大きな事典を作るという事業です。来年、旬報社から刊行する予定で取り組んでいます。

今後、10年あるいは20年、100周年や110周年以降を展望して、大原研究所はどういう方向を目指すのかということですが、研究所の中でもいろいろな議論はあるでしょうが、所長としての公式的な見解を言わせていただければ、日本の社会・労働問題研究についての国際的研究拠点を目指すということです。文科省から聞かれたら、このように答えます。あるいは、総長や理事会から聞かれても、こういう方向を目指すと思えるでしょう。

ただし、大原研究所の場合は、研究所ではありますが、社会・労働問題についての専門図書館・文書館としての性格もあります。もう一つは、このような問題についての情報発信センターでもあります。本日のフォーラムの最初の挨拶でも言いましたが、大原研究所には三つの性格を兼ね備えているという特徴がある。これは他にはない特徴です、どこか一つということではなく、この三つの特徴をうまくハーモニーを持たせて発展させていくと言いますか、そういう方向がこれからも維持されなければならないと思っております。

その中でも研究活動、特に現代的な問題に関わる研究を進めるということに、大きな重点を置くべきでしょう。その場合でも、労働問題を軸にしながら、それ以外の社会問題を含めて幅広い問題についての研究を進める。とはいっても、主体的な力量や条件の問題もありますから、できる範囲でということでは考えざるを得ませんが……。

今、大原研究所では、このような方向を踏まえて新しい取り組みにも加わろうとしています。法政大学としてサステナビリティ社会に向けての新しい研究プロジェクトが始まったからです。その中で、環境問題についてのアーカイブスを作ろうという方向が出て来ておりまして、具体的に着手しております。これに、研究所としても、できる限り協力させていただこうと考えております。また、こういう方向でのプロジェクト研究、倉敷を対象とした労働社会についての調査研究にも着手する予定です。相田副所長を中心に、現在準備を進めているところです。

それから、もう一つ大きな方向としては、やはり国際化を進めるということです。これについては、鈴木専任研究員を中心に、「労働運動再活性化のための4カ国国際比較研究」を今年から始めております。来年、この国際会議場のセミナー室を使って、国際会議を開く予定です。こういう形での比較研究を国際的にもやっていきたいと思っています。また、外国からの研究者を多く迎え入れ、午前中のゴードン先生のご報告にもありましたように、外国の研究者にも役立つような研究所、国際的な研究拠点としての機能をさらに充実していきたい。

現在も、韓国から2人、アメリカから1人、これからポーランドから1人ということで、4人の客員研究員を迎える予定になっています。こういう形での国際化を進めていく。そのためにも、ゴードン先生などからのご助力やご助言をお願いしたいと思っています。

ということで、これから、このフォーラムを跳躍台としまして、世界に羽ばたく大原研究所と大風呂敷を広げたいところですので、そういう方向でやればいいなと夢見ております。あとに続く若い人には、そういう方向でがんばってもらいたいと。こんなところで、よろしいでしょうか（笑）。ちょうど時間になりましたので、これくらいで話を終わらせていただきたいと思います。（拍手）

司会 では、時間がまいりましたので、これで第1部、第2部に亘りました、90周年記念フォーラムのプログラムは終了にしたいと思います。最後になりましたが、パネリストの4人の方、どうもありがとうございました。（拍手）それから、フロアの今日お集まりの方々、どうもありがとうございました。これをもちまして終わります。（拍手）